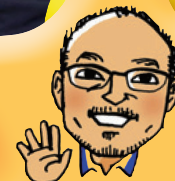




チャイルド  
**ACP**  
 アクティブ  
 プログラム  
 クリニック  
 監修:佐藤善人  
 (岐阜聖徳学園大学教育学部准教授)



“遊びの伝道師”  
 が行く!

第11回

(取材協力)愛知県名古屋市:  
 東山スポーツ少年団

## 子どもたちの心をつかむ 指導のひと工夫

前回に引き続き東山スポーツ少年団の少年少女剣士たちのもとを訪れた佐藤善人先生。今回お伝えしたいのは“遊びの伝道師”がみせる「指導法」そのものだ。導きたいゴールをイメージし、実際に子どもたちの心をつかんでそこへ誘うための、秘訣とは……。



### 松井満男先生のお話



継続は力なり。子どもたちが剣道を生涯スポーツとして続けるように導くことが、われわれの務めだと考えています。だから、剣道を嫌いにならないように、好きでいてくれるように、ということを常に考えて指導に当たっているのです。そんな方針である当団にとって、ACPの導入は非常にプラスになりました。剣道の稽古だけでは不足しがちだった団員同士のコミュニケーションが活発になったこと。仲間意識が高まったこと。そして、子どもたち自身が考え、積極的に参加する姿勢が身についたことが、大きな成果です。

遊びの導入によって新入団員と継続団員との壁がとれるのが早くなり、指導者と団員との関係だけでなく、子ども同士の関係が深まったんですね。いまでは稽古時間になると、私たちが言う前に、自分たちで声を掛けあって整列するんですよ。以前、私は事細かく指導していました。手とり足とり教えることは簡単ですが、それで本当に子どもたちが育つのかと、はたと気づきました。手伝うところは手伝い、子どもたちでできることは「自分でやってみなさい」と見守るのも、指導ですね。

「指導法といっても、あれもこれも」と意識して子どもたちと接すると、逆に目指すところへ導きにくくなるので、自然体でいきたいと思えます」と、佐藤先生は言う。絶対的な方法論があるから「伝道師」ではなく、自然と子どもたちの心をつかむ「伝道師」の指導の一部始終を追えば、コツがいくつも見えてくる。そう考えるのが正しい。

この日の訪問では、松井先生、吉田先生に代わり、剣道の稽古前の30分、佐藤先生がACPを担当。道場入りの瞬間からの子どもたちとの触れ合いに始まり、剣道へつなぐ準備運動としての身体活動量確保を意識したプログラム。子どもたちの関心を高め、自立心を刺激するさまざまな工夫と、状況に合わせた指導者側の柔軟性など、現場に生きるさまざまなポイントを、写真とともに確認していこう。



### 子どもに目線を合わせて話す

子どもたちの壁をつくらないためには、子どもの目線に合わせて話す姿勢が大切



### まずは体を動かし一緒に遊ぶ

あいさつを交わし、着替えを終えた子どもと遊び始める。早く子どもたちの懐に入っていけば、本番の指導はよりスムーズに進む

### 勝敗の不確定性の確保 (体力・発育差に応じたハンディ)

指導者が子どもに対応するとき、もしくは上級生と下級生が遊ぶときなど、体格・体力に差がある際は子どもたちが不利と感しないよう、ハンディをつける。腕相撲を佐藤先生は片手で、子どもは両手で戦った



## 子どもたちの心をつかむ

1

## 2 自主性を刺激する

### 遊びの宿題

吉田先生は前週に「遊びの宿題」を出し、今回のセッションまでにマスターしてくるように伝えた。子どもたちは家庭や学校で練習を重ねた成果を積極的に吉田先生に披露する



### 遊び方について 子ども自身に工夫させる

自分たちがこれから行う遊びについて、状況ごとのルールを子どもたち自身に工夫・決定させることで、遊びに対する関心を高める



### 話すときは 一方的な命令ではなく、 子どもと約束する

「早くやりなさい」ではなく、「遊ぶ時間が短くならないようにするには、どうしたらいいと思う?」「佐藤先生に新しい遊びを教えてほしい人は手を挙げて」といった具合に、子どもたちがどうしたいのか、その気持ちを確認する



# 3

## 身体活動量確保の工夫



### 環境に応じたアレンジ (走る→歩く)

20名以上の団員の安全を確保しながら鬼ごっこをするには、道場の広さは十分ではない。だから、アレンジ。佐藤先生は、全員「歩くこと」をルールに入れて鬼ごっこを始めた



### さまざまな遊びを提供する

遊びセッションを単調にしないために、さまざまな遊びを行ったり、遊びを組み合わせたりする。稽古につながる動きを含む遊びをすることで、子どもたちの剣道の技能向上も期待できる



### 徐々に難易度・活動量を 上げる工夫

オニ交代の鬼ごっこ、オニ固定の鬼ごっこ、オニ固定のおりオニといったふうに、シンプルな遊びから始めて徐々にルールを複雑にし、その後の活動に適した運動量を確保する。子どもたちを飽きさせない効果も期待できる

### 肯定的な言葉がけ： 結果管理ではなく 経過管理、 具体的に褒める

勝った負けたという結果ではなく、そこへ至るまでの中間の活動や考え方を、見て聞き出すことで、子どもたちはより自分たちの行動に意義を感じることができる



### アイデアグッズの活用 (うさぎとかめ)

「右」「左」の代わりに「うさぎ」「かめ」と動き方を指示する。剣道の稽古にも遊びの要素を取り入れることで、遊びを通してスポーツの楽しさを体験させる。とくに、新入団員や低学年の子どもたちの指導に効果的



うさぎ  
(右手)

かめ  
(左手)

# 4

## 楽しませるための 準備と工夫

### みんなで友だちを応援する

遊びのなかでアウトになった子どもたちは、残っている子どもたちに声援を送る。そうすることで仲間意識が強まり、集団の雰囲気が格段にアップする



### 指導者も子どもと一緒に 遊びを楽しむ

指導者はセッションの前に入念な準備をしたうえで、子どもたちと一緒に遊びながら、状況に応じて計画を柔軟にアレンジする能力が必要。そうしながら最も大切なのは、「先生も楽しんでいる。この遊びはそんなに楽しんだ」と子どもたちに感じさせること



性別や年齢を問わず、子どもたちにはみんなで仲良く遊んでもらいたいもの。  
何かポイントはあるのでしょうか？ 遊びの伝道師・佐藤善人先生がお答えします。



**遊びの説明をしようとしても、子どもたちが話を聞いてくれません。  
こんなとき、指導者はどのように関わればよいのでしょうか。**



子どもは遊びが大好きです。そのため、指導者から「遊ぶよ」と言われただけでワクワクして、つい騒いってしまうことがあります。そんな姿に対して「静かにしろ！」と怒鳴っては、せっかくの遊びへの期待がしばむばかりか、主運動であるスポーツの取り組みにまで悪影響が出る恐れがあります。

まずは子どもと、遊び実践に関わる約束を決めることが重要です。私は、子どもと2つの約束をして遊ぶことにしています。一つは「話をしっかり聞くこと」です。話を聞かなければルールがわからないので遊ぶことはできません。もう一つは「ルールを守ること」。どんな遊びであっても、誰かがルールを守らないと楽しくないからです。

はじめに約束を決めることで、それを守らない行為は「子どもの責任」となります。つまり、大好きな遊びをしたいのなら子ども自身が積極的に約束を守らなくてはいけない状況をつくるのです。それでも話を聞かなければ、怒らずに遊ぶこと自体を止めてはどうでしょうか。きっと子どもたちは戸惑うはずです。「遊びたいのに……」「どうしよう」「ねえ、話を聞こうよ」、そして子どもたちから「先生、話を聞くので遊ばせてください」と訴えてくることでしょう。

遊びを“与えている”うちは、子どもは話を聞かないかもしれません。子どもが自ら遊びを求め、主体的に遊ぶ姿を目指すために、ぜひ「約束」を決めてみてください。



**遊びやスポーツの輪にうまく入れない子どもがいます。指導者はどのように関わればよいのでしょうか。**



先日、低学年の児童と遊ぶ機会がありました。その子はなかなか遊びの輪に入ることができず、一人で遊んでいました。低学年のためか、周囲の子どもも積極的に関わろうとはしません。私はその子と手をつないで、ほかの子どもたちの遊びのなかに入りました。すると次第に表情が明るくなり、少したつと私の手を放してほかの子どもたちと楽しく遊び始めました。

スポーツ少年団でも、入団当時はほかの団員と馴染めない子がこういった状況に陥ることはあるでしょう。もちろん、指導者が見守っているうちに自然と仲よく遊んだり、協力してスポーツをしたりすることができる子どもがほとんどだと思われます。しかし、いつまでも輪に入ることができず、それが苦になって団活動に参加しなくなる子が生まれていることもしばしば耳にします。

現代の子どもの中にはコミュニケーション能力が低い子も少なくないといわれています。そういった問題を抱えた子には、指導者が積極的に関わることも必要でしょう。少しきっかけをつくることで、「遊びたい」という子どもの欲求がふくらみ、自らの力で仲間の輪に入ろうとするはずですが、ただし、いつまでも指導者が関わっていても楽しく遊ぶことができません。少し馴染んできたらそっと背中を押し、あとは温かく見守ることも大切な指導方法の一つです。

ACPに関する質問や悩み、感想などをお寄せください。60ページ「読者の広場」で募集するお便り・プレゼントのご応募に、皆さまの声を添えていただければ、今後の誌面の参考にさせていただきます。

さとう・よしひと

1972年、神奈川県生まれ。鹿児島大学卒、東京学芸大学大学院修了。岐阜聖徳学園大学教育学部准教授。岐阜県内の小学校や中学校の教諭、東京学芸大学附属大泉小学校教諭を経て現職。専門は体育科教育学。日本全国で体育・保健体育の授業を参観して授業づくりに関わり、子どもと運動とのよりよい関係づくりを目指す。